

ワンパンマン ～不思議な隣人～

Enoch365

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒーロー協会の現状最強戦力であるS級ヒーロー。

『戦慄のタツマキ』

過去の経験から他人を一片たりとも信用しない彼女。

そんな彼女のお隣に越してきた不思議な青年『XI（サイ）』。

様々な出来事からサイのおおらかさと人としての強さに触れ、人との付き合い方を覚えていくタツマキ。

彼女達と周囲の人々のお話。

ワンパンマンの二次創作になります。

オリジナルのキャラ、設定が入っており村田板且つ単行本のみ知識となっています。

よろしく願います。

目次

第一撃 引っ越してきたお隣さん

1

第二撃 勧誘、フブキ組

26

第一撃 引っ越してきたお隣さん

とあるマンションの一室。

少女らしい、もとい女性らしい家具やカーテンの置かれた部屋。そんな部屋に目覚まし時計の耳障りなアラーム音が鳴り響く。モゾモゾとベッドの毛布の隙間から腕が伸び、時計を指さす。

「…うるさい」

すると触れてもいないのにピタリと突然アラーム音が鳴りやみ、ムクリとベッドから起き上がった体はとても小さい。ピンクを基調とした水玉のパジャマ、鮮やかな緑のパーマがウサギの顔をデフォルメしたスリッパをつっかけて少女は寝室を出た。

パパッと手早く歯を磨くとテレビの前のソファアに腰かける。

「災害チャンネルは…」

少女が大型のテレビに指を向けると、ひとりでに画面が点灯した。

『本日、大きな事件の発生や怪人の出現などの報告はなく――』

「…何よ」

少女は携帯を取り出し一つの番号にコールする。数回のコール音の後、穏やかな声が耳に入った。

『おはようございます。タツマキさん』

「おはよう、怪人は？」

『今のところ報告はありません。至って平和です』

「…そう」

『連日怪人のお相手を依頼していましたがし本日はゆっくりしてください』

「——わかったわ、それじゃあ」

プツリ、と通話を切ったタツマキはテレビの前のソファに腰かけた。

「これはまた……アレね——暇ね」

少女が手をかざし、冷蔵庫から牛乳を取り出して飲む。

「何しよう」

タツマキの仕事はヒーロー。怪人を倒し、災害を防ぐ。

趣味らしい趣味もなく、過去の出来事から他人を信用しないタツマキは友人といえる人間もない。つまり彼女には暇な時間を潰す手段と言うものが存在しない。

「…パトロールでも行こうかしら」

そう思いクローゼットの中から彼女のシンボルでもある真っ黒なドレスを取り出し着込んでいく。

太腿まで大きく露出するドレスなのだが、彼女が年齢の割にあまりにも幼い体型なので彼女を見慣れているS級ヒーローの中では童帝という少年しか顔を赤らめる事は無い。

その時、チャイムの音が部屋に鳴り響く。

「…」

あまりヒーロー関係以外の人間とは好き好んで喋ろうとしない彼女は出ようかどうか少し考え込んだ後、玄関へと向かった。

「…何」

ガチャリとドアを開け、U字ロックがかかっているため少ししか開かない隙間から外をうかがうと

「おはようございます。昨日の夜遅くに隣に越してきた者なんですけど…お母さん居るかな？」

手に食器用洗剤のギフトを持った青年が立っている。背は平均程度だが髪が銀色のストレートであり、中性的な顔立ちをしている。

「…」

タツマキは何も言わずに一旦玄関のドアを閉め、U字ロックを外すと一気にドアを開け放った。

「失礼ね！私はもう成人してるわよ！アンタ私が誰かわかってるんでしょうね!? ブッ飛

ばされたいのアンタ!？」

「へ?」

猫が威嚇するように睨み付けてくるタツマキを見て青年が驚いた顔をする。

「成人って…」

「28よ!」

「マジか…」

タツマキの頭から目線を下へと滑らせていき首を傾げる青年。

「いや、失礼しました。自分は隣に引つ越してきた『X^{サイ}I』という者です。本当にすいません、これどうぞ」

しかし一度姿勢を正した後、礼儀正しく一礼をして手に持ったギフトを差し出す青年。

タツマキは目の前に差し出された食器用洗剤のギフトを見ると

「いらないわ、私自炊しないし。それにこの家にも寝るとき以外いないから」

そのままドアを閉めてしまった。

「全く……女性になんて事言うのかしら。しかもS級ヒーローの私を知らないってどういう見よ」

相手が同業のヒーローなら説教をするところだったが自分を知らない当たり田舎からでも越してきた一般人だろうと当たりを付け、イライラをどうにか飲み込んだタツマキ。

「はあ、本当に何しようかしら」

そう思い部屋に戻ると

『速報です、ただいま対怪人兵器開発研究所から対怪人兵器が街で暴走をしていると通報が入りました。既にJ市の住民はシェルターへの避難を完了させており——』

丁度災害チャンネルから速報が流れているところだった。

「ご飯は一仕事終わってから食べようかしらね」

これはいい暇つぶしが出来ると思ったタツマキは玄関に置かれた黒いハイヒール履いた後にベランダへと出ると、手すりの上に立つ。

「J市だったわね」

トン——と手すりから飛び重力に任せて落下していく小さな身体が少しずつ速度を緩め停止した後、今度はとてつもない速度で正面へと飛んで行った。

風に揺られたカーテンがはためく傍でベランダの仕切りの向こうから

「おお、速いな…テレビで見るよりずっと小さくてビックリしたけどやっぱり『戦慄のタツマキ』なんだよな…。俺じゃあ跳ぶことは出来てもあんな風に飛ぶことは出来ないし…流石だ」

小さな拍手と感嘆の言葉が発せられた。しかし次の瞬間

「まあ……俺も行くか」

という言葉と共に隣のベランダからも影が一つ、地面へと向かって落下していった。

*

「想像以上にひどい状況ね」

タツマキが上空から眺めているのは暴走した兵器が通過していった住宅街。家屋としての機能が残っている家の方が圧倒的に少ないと思われるほど破壊されている。

「避難が終わってる事は幸いだったわ、深海族の事で避難訓練を行ってたからかしらね。この破壊の規模じゃあ死人が出てもおかしくないし」

そうして飛ぶ速度を上げていくと建物が爆発し、崩れていくのが見えてくる。

「いた…と言うか多いわね」

タツマキの目の前にいるのは10体の人型ロボット。暴走していると言う通りに背中にあるメカメカしいバックパックから小さなミサイルの様な物を飛ばし続けている。

「まあ付近に人いなさそうだし、辺り一面ごと平らにしようかしらね。逆にそっちの方が後処理楽でしょ」

タツマキはロボット達がいる周囲へと手をかざし力を込めようとした瞬間——どこ

からともなく子供の泣き声が聞こえた。

「ッ?…逃げ遅れたのがいるの?」

ロボットも子供の泣き声に気づいたようで、周囲を見回した後、何かを見つけたように一点の方向へと走り始める。タツマキがロボット達の向かった方向へ目を向けると少年が家の瓦礫に足を挟まれ動けないようだった。

「ちよつと待ちなさいよ!」

タツマキは瓦礫の山を飛び越えて行くロボット達の頭上を追い越して一足先に少年の元へとたどり着くと、即座に瓦礫を退けて少年の体を浮遊させた。

「もう安心しなさい、ヒーローよ」

「つぐす…ありがとう」

少年の足は赤く腫れあがっており、歩いてこの場所を離れる事は出来ないだろう。

「全く、親は何してたんだけ…少し待ってなさい。こいつ等潰して助けてあげるから」

「う、うん…」

タツマキは少年を近くの瓦礫の上にゆっくりと下すとロボットを睨みつけた。一足遅くタツマキたちの数十m手前で立ち止まったロボット達はタツマキと少年の姿を見ると

『…セイゾンシャカクニン、3mヒダリハウコウ、ミチノエネルギーカクニン…カイジン、カイジン』

と、機械らしいつぎはぎの声でタツマキへと装備を向ける。

「はあ!? 誰が怪人よこのポンコツ! これは超能力よ! 研究者はそんな事もインプットしなかったの!? 戦場に出すならS級の情報位インプットさせときなさいよ! ロボットだ

けじゃなく開発者もポンコツね!」

『ハイジヨ、ハイジヨ』

10対の内の1体が肩のタレットから弾丸をタツマキに向けて発射していく。

「…全く」

タツマキが手を正面にかざすと彼女の1m手前で弾丸がすべて停止していった。

「機械の癖に人間に奉仕できないなんて存在する価値ないわよ…潰れなさい」

未だにタレットから弾丸を発射し続けてロボットへともう片方の手をかざし、振り下ろすような動作をするベゴリ——とロボットの頭部が潰れ、重みに耐えきれないかのよう肩、胸、足と順に潰れていった。

「()から一体を潰すのは訳ないけど…もし他にも逃げ遅れがいるかもしれないってい

う可能性を考慮するとそれは出来ないし…。地道に一体一体潰していくしかなさそうね」

そうやって一体を潰し終えた後目線を他のロボットへと向けると、ロボット達は建物の陰へと身を隠してしまった。

「……鬱陶しいわね。雑魚は雑魚らしく正面から来なさいよ」

しかし彼女の能力の特性上見えていない位置の敵を攻撃することも可能ではあるが、もし他に逃げ遅れた人間がいたらという状況を考えると目視しての攻撃しか行いう訳にはいかない

「…どうしたものかしら、このまま雑魚ごときに拮抗状態なのも腹立つし——ッ!？」

そう考えていた矢先——突然、タツマキの視界がグラリと歪み体がふらつく。

「一体何が——ッ!」

見れば物陰に隠れ、こちらを伺うように見ていたロボットの背中が揺らめいて
いる。

「(熱…? いや…ガスね…にしても、無臭のガス使うなんて周囲への被害考えなさいよ全
く!)」

彼女からすれば周囲の燃えている家屋もある所を見るに引火性ではないのが救い
だったが、吸い過ぎれば少年も危うい。

「さっさとアイツを——このッ」

物陰にいるロボットへと手をかざそうとした瞬間、別のロボットがミサイルを発射し
てくる。

「(対怪人用ってだけあって、無駄に高度な戦術仕掛けて来るじゃない…)」

ミサイルを止めようと手をかざすがまた別の方向からミサイル——と多方向からタツマキをかく乱するかのような攻撃。一向にガスを出し続ける一体を仕留めることが出来ず、彼女の身体のふらつきも大きくなっていく。

「(本格的にマズいわね——雑魚のくせにここまでやるなんて……)」

ガスの効果であろうか、数発のミサイルがタツマキのサイコキネシスの範囲から外れて周囲の家の瓦礫へと直撃する。

「(……どうすれば……いつそいるかも知らない他の逃げ遅れよりも確実にこの子を救う為に周囲を潰すしかないわね。じゃないとこの子も一緒に……全く、近くに手の空いたヒーローは——)」

『いざという時に誰かが助けてくれるとは思ってはいけない』

周囲事攻撃を行うか否かが頭の中で堂々巡りする中、近くにヒーローが来ていないかと考えた瞬間——昔掛けられた言葉が頭の中で響きタツマキは頭を振る。

「(馬鹿ね——そうよ、他人なんて信用できない。私がどうにかするしかない)」

彼女の目に活力が戻り、手を高く掲げる。

「(やるわ、周囲、全部…ブツ潰す!!——ッ?)」

タツマキが手を振り下ろそうとしたその瞬間に、足の力が抜け地面に膝をついてしま
う。

「(ウソ…もうこんなに力が入らないなんて…マズい…)」

そう考えた瞬間、彼女が自身の力を上空へと収束させたが故に彼女の支配から外れたミサイルが彼女の付近へと着弾していく。

「…（見えないガスに気づけなかった私の油断…ね）」

次のミサイルはタツマキの正面へと直撃するだろう。彼女が少年の方を向くと、少年はガスの作用で意識を失っているようだった。

「良かった…（これであの子は痛みを知らずに——）」

「いや、良くないですよ」

パチン、と小さな音と共に目の前へとミサイルがバラバラになり。瓦礫の山へと落ちていく。

「え…?」

タツマキが振り向くと、今朝あつたばかりの青年が目の前に立っているではないか。

「ア…ンタ…なんで…」

「一応これでもB級の102位なんですよ…僕。貴方の『戦慄』といったような二つ名はありませんが…」

「…」

喋りながらも青年がパチンと指を鳴らしていく度に周囲のミサイルがバラバラになっっていく。

「僕も超能力者なんですよ。貴方どころか貴方の妹さん——『地獄のフブキ』さんの足元にも及ばない程度の出力ですけどね」

そう言いながらどんどんミサイルをバラバラにして切り落としていく青年。

「?」

タツマキは彼の用いる超能力が何かおかしい事に気づいた。

周囲に落ちていくミサイルは全て鋭利な何かで切られたかのようにスッパリと切れている。自分やフブキが落そうと思ったら握りつぶされたり押し潰されたかのようなぐしゃぐしゃの形になっている筈だからだ。

「あ…」

タツマキが再度青年を見ると彼の周囲がキラキラと煌いている。よく目を凝らさないと気づけない程だが青年の周囲にとってもなく細いワイヤーの様な物が漂っており、その一本一本に光が反射しているのだ。

「それで切ってたわけ…」

「ええ、ミサイルですからキチンと着弾しない限り大丈夫ですし。こういった小物を上手く使う事も大切なんですよ」

全てのミサイルを落とした青年が手を振ると周囲の煌きが一気に広がる。煌きの範囲がロボット達すべてを取り込むと一気に収縮し、次の瞬間ロボット達もバラバラになり、機能を停止させた。

「…」

「まあ、こんな感じですよ」

最後に青年が指を鳴らすと、煌きが彼の手のひらの上へと集まり、3つの塊へと変化する。

「さて、一応救助を呼んでから周囲に逃げ遅れた人がいないか確かめますんで貴方は休んでてください」

手の平に乗った3つの銀色のサイコロを弄びながら携帯を取り出し、ヒーロー協会へと連絡を始める青年。

「ああ、すいません。一応戦慄のタツマキさんと協力できたおかげでロボット壊せました。ロボットの数は9で間違いないですよね…え？10なんですか？」

「待って、私が一体壊してるわ…」

「ああ、そうなんですか…いえ、こっちの話です。10体全部壊してみたいですよ。ええ、では救助お願いしますね。子供が一人気を失っていますますがまだ逃げ遅れが他にもいるかもしれないので…ええ、失礼します」

通話を終わると青年はタツマキと少年を見て微笑んだ。

「さ、ではこのまま救助を待ちましょう」

*

「本当にありがとうございました！」

救急車等の到着と共に少年を探しに来た少年の両親が青年に頭を下げる。

「別にいいですよ。パニックに陥った民衆の中ではぐれてしまったものは仕方がないですし。それに大半は彼女の働きですから」

青年はタツマキの方を見る、少年の両親はそれを受けてタツマキにも頭を下げた。

「私の働きじゃないじゃない。アンタがお礼されるべきよ」

タツマキは顔に取り付けられた酸素マスクを取り払い、青年を見た。

「いやいや、自分なんて程度が知れてますから。では、もう病院に行ってください。詳しくお子さんの体を調べておいた方が安心でしょう」

「はい、本当にありがとうございました！」

子供を乗せた救急車に乗り込んで走り去っていった両親を見送ると、青年がタツマキの元へと歩み寄る。

「じゃあタツマキさんも病院に行つて身体検査は受けてくださいね。自分はあまりガスを吸つても無いですし大丈夫なんで」

手を振つて家の方向へと瓦礫の山を歩き出した青年の背にタツマキは声をかけた。

「ちよつと貴方！名前は何だったかしら？」

「……『X^{サイ}I』です。以後お見知りおきを」

「サイ…ね…」

自分とは全く使い方の違う超能力の形を目の当たりにしたタツマキ、ヒーローになつてから自分でも久しぶりに他人に感心したと彼女は自覚する。彼は自分はおろか妹のフブキにさえ超能力の出力では足元にも及ばないと言っていた。しかしそう言つてお

きながらS級の2位である自分が敗北しかけた相手を容易く打ち破って見せたのだ。

それこそ彼の『闘い方』についてもっと見て知りたいと思つたタツマキは、その名前を深く記憶に刻み込んだ。

第二撃 勧誘、フブキ組

F市に存在するビル、とあるレンタルオフィスの一室に黒一色のスーツを着込んだ人間が数人集合していた。

「彼が最近活躍しているって噂のB級ヒーローね」

パラ、と一枚の紙を机の上に置いたのは深い緑色をしたドレスを着たグラマラスな女性。傍には数人の黒スーツを着た男女が控えている。

「はい、フブキ様。彼はC級ヒーローになってから銀行強盗や暴徒の鎮圧、幾つかの事件をハイスピードで解決しており最短距離でB級に昇格しています。数日前に起こった対怪人用兵器の暴走事件の解決も彼が一枚噛んでいるそうです。今現在のランキングはB級43位です」

傍に控えていた男の内、長髪を後ろで結った男がフブキと呼ばれた女性の前に新しい

紙を差し出した。フブキは差し出された紙に視線を滑らせると、満足そうに頷く。

「そう…前例は余り多くはないけど期待値は高いわね。フブキ組に加入させておいて損は無いわ、彼の住所は？」

「(ト)ちら(ト)」

次にフブキの前に髪を差し出したのは百合の花弁を模したかんざしを頭に挿した女性。彼女が差し出した紙をフブキが読んでいくと、フブキの顔が段々と青褪めていく。

「フ、フブキ様？如何されました？」

フブキの様子が変わったのを見て女性が心配そうに問いかけた。

「本当にこの住所で間違いないの？」

「はい、そちらで間違いないようですが…」

「そう…」

女性の言葉を聞き、フブキは綺麗に整えられ磨かれた爪を軽く噛んだ。

「…マツゲ、山猿」

「はっ」

フブキに呼ばれた二人の男が前に歩み出る。マツゲは先程フブキに紙を差し出した男、山猿は身体の大きな偉丈夫で、それぞれB級ランキング2位と3位の男である。

「貴方たち二人で行って来て…私は行かない」

「え？…ええ、わかりました…ですがよろしいのですか？フブキ様が来られないまま勧誘となると相手の心証を悪くする恐れがありますが…」

「構わないわ…話だけして来て」

「わかりました。行くぞ山猿…リリー、住所の紙をくれ。失礼します、フブキ様」

「ええ…頼んだわよ」

マツゲと山猿が部屋を出ていった後百合のかんざしを挿した女性、リリーがフブキに問いかける。

「フブキ様、何かお困りごとが？」

「——の部屋なのよ」

フブキは爪を噛みながら小さくつぶやいたが、小さすぎて女性の耳には入らない。

「…？申し訳ありません、よく聞こえませんでした」

「——姉の住んでる部屋の隣なのよ…彼の部屋…」

「え…と言う事は、お隣にタツマキ様がお住まいになつてゐると？」

リリーは信じられないと言つた顔でフブキの顔を覗き込むが、フブキの反応からして事実であるようだった。

「そう…行つたら絶対に絡まれるもの…行きたくないわ…」

「成程…」

フブキは姉のタツマキに対して強烈なコンプレックスを感じている。偶然会えば話すのだがそれ以外ではあまり顔を合わせたくないと言うのが彼女の素直な気持ちである。とはいえ、一緒に買い物にも行つたりすることはあるので仲が悪いと言ふ訳でもない。単純に姉との付き合い方が分からないのだ。

「出来れば今回の勧誘で来てくれたらいいのだけれど…私から出向くことになつたら…」

頭が痛いわ…」

フブキはため息を一つつくと額を押さえて天井を仰いだ。

*

フブキから命令を受けたマツゲと山猿は紙に書かれた住所に到着した。

「……で間違いないな…」

「ああ、部屋番号も間違いない」

山猿の出した紙を再度確認してマツゲはドアの前に立つと

「B級43位のX^{サイ}I！我々はB級ランキング1位のフブキ様から遣わされた者達だ！話がある！」

大声で玄関にかけて呼びかける——が、ドアが開く様子は無い。

「……」

「…出てこないな」

「よし、もう一度……おい!! B級43位のs「うつさいわね! 近所迷惑よ!」——あべしっ!!」

「マ、マツゲえ!!??」

もう一度、とマツゲが呼びかけ始めると突然玄関ノドアが勢いよく開け放たれマツゲの顔面に直撃。マツゲは勢いよく吹き飛ばされ後ろの壁に激突してしまいズルズルと崩れ落ちた。

「まったく…朝早いんだから静かにしなさいよ」

開け放たれた玄関に立つのは小さな少女、タツマキであった。タツマキはピンク色のパジャマを着ておりマツゲと山猿を睨みつけている。

「タ——タタタタタツマキ様!？」

「え、でも…え…?」

山猿はあたふたと慌てふためき、マツゲは鼻血が出続ける鼻を押さえながら住所の書かれた紙を取り出し部屋番号を確認している。

「私はここの隣に住んでるのよ……ったく…X^{サイ}I!客よ!」

タツマキは振り返ると奥に声をかけた。

「いや、いきなり玄関まで突っ走らないでくださいよ…下の人に迷惑じゃないですか」

「コイツらがうるさいからよ。それに次からは浮遊してやるからいいでしょ別に」

「そうですけど…そもそもあんな風に開け放つたら怪我しちゃうじゃないですか。現に鼻血出されてるみたいですし…ティツシユ持つてきますね」

奥から出て来たのはジーンズにパーカーというラフな格好をした銀髪の青年。青年は腕を組みながらタツマキを嗜めると一旦奥に引つ込みティツシユを数枚引き出してマツゲに手渡した。

「ああ…ありがとう」

「それで…フブキさんからお話があると言う事ですが？」

「——…ツくう」

「どうしました…？」

「いや…まともに対応してくれたのが少しうれしくてな…」

鼻にティッシュを詰めながら目頭を押さえるマツゲと山猿。彼らは依然の勧誘で口
クな目に合わなかったたのでその時の一件を思い出しているようだった。

「ふんっ、どうせフブキのB級同好会の勧誘でしょ?」

タツマキはフブキの作り上げたフブキ組を快く思っていない。フブキ組はフブキの
超能力の才能を食いつぶす存在、彼女にたかる足手まといの集まりと考えているから
だ。

「B級同好会ではなくフブキ組なんですが…ええ…一応そうです…ですが…」

チラチラとタツマキの様子を伺うマツゲ。話しづらそうにしているその様子を敏感
に感じ取ったタツマキはマツゲを睨みつけて委縮させる。

「…何よ、私は邪魔ってわけ?」

「いつ、いえ…そういう訳では…しかし何故タツマキ様がこちらに？」

「……朝ごはんを食べさせてくれるっていうから来ただけよ。先に奥に行ってるから」

そう言うのとタツマキはふわふわと奥へと姿を消した。

「…すいませんね、朝から痛い思いさせちゃって」

「いや、構わない……だが、お前とタツマキ様と一体どういう関係なんだ？」

マツゲと山猿からすれば自分達が仕えているフブキの姉、タツマキとB級の間人が一緒に朝を過ごしているという事実が信じられないでいた。

「うーん…何でしょう、一応戦場を共にした仲とも言えますし…同じく超能力を扱う同類とも言えますし。それこそご飯と一緒に食べる関係とも…」

腕を組み首を傾げるXIにマツゲと山猿は言葉失う。

「で、でもタツマキ様は全ヒーローの中で最も扱いにくいと噂のお方だぞ…よく無事でいられるな？」

声のボリウムを極力落としてX Iに話しかけるマツゲ、X Iはその言葉を受けて苦笑する。

「まあ、口下手で恥ずかしがり屋なだけで性格そのものは悪くはないと思いますよ。今のところ攻撃されたりはしてないですし。——それにしてもフブキ組の勧誘だとか？」

「あ、ああ…フブキ様がお前の働きに目を付けられてな。どうだ、フブキ組に来ないか？」

少し脱線した話題をX Iが自ら修正すると、マツゲは背筋を伸ばして改めて勧誘を申し出る。

「申し訳ありませんが、お断りします」

「……何故だ？」

XIの答えにマツゲの顔が険しくなる。

「フブキ組は人数で怪人や賞金首を叩くことが多いと聞きます。そして功績と懸賞金もまた人数で分配すると……でもそうしてしまうと落ちこそしないけど上には行けないですから」

至極当然、と言わんばかりにXIは答えた。マツゲはその言葉を聞き目を細める。

「上……A級の事を言っているのか？」

「ええ、まあ……そうですね」

マツゲは一度ため息を吐くと肩をすくめた。

「残念だがそれは無理だ…俺達はB級になつて長いから分かる。Aから先は俗に言う天才の集まりだよ…ネットの掲示板なんかではS級からが本物のヒーローだ、なんて言われてはいるがそれは戦場を経験していない人間の戯言だ。フブキ様もA級になる事自体は何ら問題はない…しかしあのフブキ様でさえA級1位にはなれないんだ…それだけの化物ぞろいの世界なんだ、A級は」

務めて冷静に、マツゲはX-Iを説得するかのように話す。しかしX-Iは真面目な顔でマツゲの顔を見据える。

「——それでも僕は取り合えずAに行きますよ。それに答えこそ変わりませんが勧誘されるならご本人からお誘いして貰いたかったですね、一応僕にも多少のプライドはありますから」

「……それに関しては謝罪しよう…すまなかった。行くぞ、山猿」

「あ、おい…いいのかこのままで」

一度頭を下げた後踵を返して歩き出したマツゲを山猿が止める。

「…？何がだ？」

山猿はマツゲの耳元へ手と口を近づけてX-Iに聞こえない様に

「いや…制裁の件だよ…入らなかった奴は少し痛めつけるっていうあれだよ」

そう話すと、マツゲは呆れたように山猿を見上げる。

「出来るかそんな事、タツマキ様のご友人だぞ。死にたいのかお前は」

「——ッ…そ、そうか…それもそうだな…失礼する」

その言葉に山猿は一度廊下の奥を見て、ため息をついた後にX Iに一礼をした。

「ええ、もしまた来られると言うのなら今度はフブキさんも来られるように伝えておいてください。お茶菓子を用意しておきますから」

「わかった。お伝えしよう」

背を向けて帰っていくマツゲと山猿を見送るX Iの背後、廊下の陰からタツマキが話しかける。

「――断ったのね、勧誘」

「ええ、こう言うのも彼らに失礼ですがメリットがあまり…」

「……そう」

肩をすくめたX Iを見てタツマキが息を吐く、その様子を見てX Iは微笑んだ。

「妹さんに僕を取られなくてよかったですね」

「——ツハア!? 何言つてんのよ!? 意味わかんない事言わないでくれる!? アンタなんていなくても別に寂しくないんだから! 勘違いしてんじゃないわよ!」

「だって僕がいなくなったらまた一人で外食だけになってしまいますからね…でも…へえ……寂しいんですか?」

「——ツ!! もう!!」

「あだっ」

バスン、と奥からクッションが飛んできてX Iの顔を直撃する。

「ぐ飯にするわよ!」

「待ってくださいってば」

直ぐにX Iに背を向けて奥へと入っていったタツマキにX Iは苦笑しながらクツションを拾い上げた。

*

「どうだった？」

帰ってきたマツゲと山猿を見たフブキが問いかける、するとマツゲは言いにくそうに

「駄目でした…状況が状況だったので制裁も不可能であると判断し、しませんでした」

「状況が状況？…どういう事？」

フブキがマツゲに聞くとマツゲはどこか言いにくそうに

「いえ…その…彼の家を訪ねたのですが彼ではなくタツマキ様が出てきて…」

先程の出来事を思い出し、話し出す。

「——は？部屋を間違えたの？」

「違うんです——信じられないかもしれませんが…彼の部屋にタツマキ様がいらっ
しゃったんです」

「……………え？」

凜とした表情を崩さないフブキが珍しくきよとした顔でマツゲの顔を見た。

「本当ですフブキ様、パジャマを着たタツマキ様が彼の部屋に…彼女曰く『朝ごはんはんに誘
われたから』らしいのですが…」

「——う、嘘でしょ!?!お姉ちゃんが他人と関わるどころか家に上がり込むなんてある訳

ないじゃない!？」

それこそ信じられないと言う顔でフブキは声を荒げる。

「ウソも何もこの目で見てきたんです」

「マツゲが鼻血を出したのもタツマキ様が玄関を思いつきり開けた時に顔を強打したからで……」

マツゲの顔と山猿の態度を見て嘘はついていないとフブキは確信する。

「ほ……本当なのね……」

「どうされるのですかフブキ様。彼はタツマキ様のご友人とも取れる立場にありますが……」

「……わかった。次は私も行くわ」

「しかし…タツマキ様と喧嘩になったりしたら…」

「確かにそういう事も有り得るけど…何より興味がわいたのよ。姉さんが無下に扱われないX Iと言う人間に」

リリーがフアーコートをつブキの肩に掛け、ドアを開ける。

「行きましょう、車を回してちょうだい」

「「はっ！」」

＊

「…」馳走様」

「お粗末様でした」

朝食を食べ終えたタツマキは手を合わせると、食器を浮かせて流し台へと運びサイコキネシスで洗い始めた。

「いやあ、助かります。洗い物って面倒なんですよ。食洗器買おうかな…」

「アンタもサイコキネシスでやればいいじゃないの」

「毎回できませんよ、疲れますし…。楽が出来るなら楽をするのが一番です」

「ふーん…そう…」

その時またインターホンが鳴り二人の視線は玄関へと向けられた。

「…またあいつ等かしら、仕方ないわね」

ゆらり、とタツマキが立ち上がり玄関へと歩いていく

「今度はゆっくり開けてくださいね」

「わかってるわよ」

ガチャリとタツマキはゆっくりとドアを開けて来客を確認し――目を見開いた。

「一週間ぶりくらいかしら……お姉ちゃん」